ウィン・リョウワーリン著、宇戸清治訳

『インモラル・アンリアル Immoral Unreal 現代タイ文学　ウィン・リョウワーリン短編集』

財団法人国際言語文化振興財団・サンマーク出版

本書は、タイ現代文学の旗手、ウィン・リョウワーリンの三つの短編集（『不吉な兆し』一九九四年、『黒い手帳と紅葉』一九九四年、『人間と呼ばれる生き物』一九九八年）から訳者、宇戸清治氏が選んだ九編からなる翻訳小説選集である。巻末の訳者あとがきによると、著者のウィン・リョウワーリンは、一九五六年三月二三日生まれで、タイのマスコミや芸術界に才人を輩出していることで知られるチュラロンコン大学建築学科で学んだ後、タマサート大学の大学院で経営学修士を取得したインテリである。シンガポールやアメリカで広告業界の仕事に従事した彼は、帰国後、コピーライターを経て一九九二年に発表した短編「肉欲と涅槃」（『不吉な兆し』所収）でチョー・カーラケート短編文学賞を受賞し、文壇にデビューした。その後、長編『平行線上の民主主義』（一九九七年）と短編集『人間と呼ばれる生き物』（一九九八年。本書に六編が所収）で二回、東南アジア文学賞を受賞している。

タイの現代文学は、学生や知識人と一般人が軍部政府を打倒し、民主政権を打ち立てた一九七三年一〇月を起点とするという。バンコク民主記念塔周辺での政府軍・警察との闘争は、「血の水曜日事件」として刻印されるが、三年後には軍部クーデターによって民主政権の夢は潰え去った。こうした試練を経て登場したタイ現代文学は当然に、社会変革をテーマとする色合いが強かったが、一九八〇年代になって、その主題が個我の内省へと向かい、それにふさわしい表現手法の模索が始まっている。本書所収の「情夫」という前衛的な作品等にも、そうした新しい形式を求める先鋭的な問題意識が表われている。

本書に収められた短編九編は、ウィン文学の特色と傾向が顕著にでているものが選び出されている。本書所収の作品を、出典元の短編集に沿って見てみる。

『不吉な兆し』所収の「身元不明人―公園の哲学―」では、ある日卒然として、周囲にいる人間達との社会関係が絶たれる都市生活者の不安が描かれている。公園に住むホームレスの老人の、人生を達観したかのような、どこか穏やかな言葉に、都市化した人間の緊張が徐々に解消される。背景にバンコクの雑踏が聞こえてくるような短編である。ウィンのデビュー作「肉欲と涅槃」は、仏教が実生活の隅々に浸透するタイ社会を想起する時、その前衛性が際立つ作品である。同一ページの上段では、白抜き文字で、風俗嬢との危うくも官能的なやりとりが綴られる一方で、下段には、風俗嬢の描写と重なるように、憚ることなく現世利益を追求する仏僧の姿が淡々と語られる。例えば、武田泰淳の『異形の者』に見られた「社会主義者の仏僧」の自己解体と根本的に相違する印象を受けるのは、ウィンが、〇・

ヘンリー等に影響を強く受けた「短編のストーリー・テラー」に徹しているからであろうか。『黒い手帳と紅葉』所収の「黒い手帳と紅葉」は、かつて有能な警察官で射撃手であった男と、根絶しようのない社会悪とのどす黒い関係が、どんでん返しで明らかになる仕組みになっている。ウィンという作家の確かな取材力を伺わせる作品でもある。

ウィンの作品には、タイの政治と社会の縮図が、時に、サディスティックな表現を伴って描き出されている。『人間と呼ばれる生き物』所収の短編では、バンコクの都市居住者の屈折した内面が、隠蔽されることなく、読者の目に晒される。肢体不自由となった男の切羽詰った本音が吐き出される「窓辺のチャニアンの鉢」には、「障害者」に関わるタブー表現も多々見られる。本書の冒頭の但し書きの真意も、この翻訳集に訳者が付けた「Immoral Unreal」という命名の所以も読み進むうちに理解されよう。『人間と呼ばれる生き物』所収の短編には、死んだ父親との交流が現実と交差しながら語られる「ぼくと父の奇妙な物語」や、旅の途中でマイクロバスに轢かれた犬が不気味な不安を象徴する「路上の犬」という作品のように、作品の内部で、「父親の記憶」が重要な機能を担うものがある。ウィンの作品では、タイ社会に蔓延する物質主義や、都市生活者の精神生活に巣食う極端な現実主義が猛々しく告発される一方で、その激しさを相殺するかのように、作品内に配置された「公園」、や「植物」―例えば、「黒い手帳と紅葉」の「鹿耳樹（フークワーン）」―が、静穏な人間関係、あるいは、自然への回帰への希求を静かに語っているかのようにも感じられる。そこに、一個の生物、として人間をとらえようとしながら、ただの「生物」として切り捨てられずにいるウィンの姿を読み取るのは深読みであろうか。ウィンのエコロジー問題への関心も知りたい気がする。

ウィンの作品中、最大の問題作とされる『平行線上の民主主義』（『空劫の大河』、燦々社刊）は、タイの民主運動の裏面の歴史を扱っているとされるが、『人間と呼ばれる生き物』所収の「ラート・エカテートの三つの世界」も、一九七三年の政府軍と学生知識人たちとの流血事件を、人間の心理の動きを軸に描き出そうとした力作である。作品では、この流血事件の恐怖を背景として、政府軍の軍人、屈折した幼年時代をもつ娼家の主人、絵描きを目指していた学生活動家、という三つの人格に分裂した主人公ラート・エカテートの「生」の相貌が描かれる。作品を通じて、権力機構が人間の恐怖心と表裏一体の関係にあることが巧みに伝えられている。恐怖を土台にした暴力社会に生まれ育った人間は、平穏な社会を疎ましく感じるように躾られる。恐怖の奴隷と化した社会を無力感が覆う。事件があった当時、ウィンが一七歳の多感な青年であったことを考えると、ここで提起されている「〈恐怖〉の社会心理学」の深刻さが読み取れよう。ウィンという作家の可能性を考えると、『平行線上の民主主義』の評価も、今後のウィンの活動を見た上で、自ずと明らかになると思われる。

本書は、文学作品が、通り一遍の政治史や表層的な社会論が記述しない、社会の宿痾の深層と細部を浮かび上がらせている好例と言える。ウィンという作家の向かう道筋に、

タイの現代文学の行くべき方向性の一つが垣間見えるように思えた。ウィンの作品を、その前衛性に配慮しつつ、破綻なく、端正な日本語に訳出した訳者の力量も大いに評価されよう。

（藤井守男）